



●Batik Painting 体験

先週のマレーシア Sekolah Sultan Alam Shah (SAS) の異文化交流において、Batik Painting 体験をしました。Batik とは「はじき絵」を意味し、マレーシアやインドネシアの伝統的な芸術とされています。

左の写真は、クアラルンプールの“Petronas Twin Tower” をモチーフとした木綿のキャンバスで、金色の輪郭は圧着されたワックスで、その部分は水分が弾かれます。よって白い部分に染料を染み込ませることでより彩色することができます。右の写真が、Batik Painting で用いられた4色の染料(紫・赤・青・黄)になります。複数の染料をキャンバスに染み込ませる際に、色相のグラデーションを表現したり、染料に水を含めることで濃淡を表現したりと様々な表現が可能となります。

減法混色にかかる色彩教材のヒントになりそうです。Batik Painting” の検討はいかがでしょうか。(吉澤陽介 主査より：008)



●東西文明の十字路トルコを訪ねて

ヨーロッパとアジアが育んだ悠久の歴史や多様な自然と文化、広大な国土を体感した旅でした。ボスポラス海峡により、ヨーロッパ側とアジア側に分かれるイスタンブール。新市街は近代的な大都会。アヤソフィアやトプカプ宮殿などを含む旧市街は街ごと世界遺産です。また、肥沃な大地が育む様々な農作物が色鮮やかに食を賑わせていました。

きのこやラクダの形をしたカッパドキアの奇岩の大自然は雄大さと神秘さに包まれる感覚に陥りました。そして、かつて、キリスト教信者が身を隠すために生活をした洞窟の地下都市はアリの巣のような狭い迷路でした。

青はトルコ石やモスクのイズニックタイル。赤は国旗や国花のチューリップ文様。緑はオスマン帝国発祥の地ブルサのモスクのタイル。白はパムッカレの石灰棚やエフィソス遺跡の大理石など数々の色に出会いました。中でも、コンヤにあるメヴィラーナ博物館の屋根で輝くターコイズブルーが最も印象的でした。

やはり、「百聞は一見に如かず」の通り、色彩文化は体感して得られるものが多く、東西の多様な文化が混在している自由な国トルコを知る旅は多彩な旅でした。(園田好江)

●万葉集のなかの色名 -17

わが屋前の 時じき藤の めづらしく
今も見てしか 妹が咲容を

大伴宿禰家持 (巻 8-1627)

高円の 野辺の容花 面影に
見えつつ妹は 忘れかねつも

大伴宿禰家持 (巻 8-1630)

梅の花 枝にか散ると 見るまでに
風に乱れて 雪そ降りくる

忌部首黒磨 (巻 8-1647)

細領布の 鷺坂山の 白躑躅
われににほはね 妹に示さむ

(巻 9-1694)

秋風に 山吹の瀬の 響るなへに
天雲翔ける 雁に逢えるかも

(巻 9-1700)

「藤の花」は、御所の中にも藤壺という呼称がある通り、庭木として植えられていた。「容花」は「ひるがお」と読み、庭や垣根に植えられていた。また、「梅」は平安文学の中で最もぴんぱんに登場する花であった。

「躑躅」が登場するが、庭木として赤い躑躅の存在もあり、白躑躅とされていると考えられる。「山吹の瀬」は、山吹の花が咲き誇っていた岸を指すのであろう。

* 講談社文庫・中西進・万葉集から (永田泰弘)